# べっぷの文化財

No.50
令和２年３月

## －鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画－

鬼ノ岩屋２号墳の装飾壁画

別府市教育委員会
別府市文化財保護審議会

目　　次

1　鬼ノ岩屋古墳群の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2　過去の調査と研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

3　鬼ノ岩屋１号墳の装飾壁画 ・・・・・・・・・・・・・ 8

4　鬼ノ岩屋２号墳の装飾壁画 ・・・・・・・・・・・・・13

5　鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画の特色 ・・・・・・・・・・18

6　おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

## 1　鬼ノ岩屋古墳群の概要

鬼ノ岩屋古墳群は、別府市大字北石垣字塚原に所在する古墳群で、昭和 32 年 11 月 28 日に国の史跡に指定されている。平成 29 年２月には約 1㎞南にある実相寺古墳群が追加指定され、指定名称も鬼ノ岩屋・実相寺古墳群と変更されたものの、古くから「鬼の岩屋」として地域住民に親しまれている。

鬼ノ岩屋古墳群は２つの古墳から構成され、６世紀末から７世紀初頭に築造された１号墳は、直径約 31m の円墳、２号墳は１号墳よりもやや古く６世紀後半に築造され、直径約 37.5m の円墳であることが調査の結果判明している。

２つの古墳ともに内部に横穴式石室が構築され、１号墳は通路にあたる羨道と前室・玄室からなる複室構造となり、玄室には福岡県南部から熊本県に多くみられる石屋形と呼ばれる石棺が設置されている。２号墳は羨道から直接玄室へとつながる単室構造となっており、玄室には被葬者を安置する屍床と呼ばれる一枚石が設置されている。なお、２号墳の玄室規模は長さ 4.27m、幅 3.11m、高さ 3.76m を測り、玄室の規模としては大分県内最大規模を誇る。

石室内部には、装飾壁画が描かれておりこの古墳群の価値を一層高めている。別府市教育委員会では、平成 20 年度から始まった一連の調査の中で、装飾壁画に関しても調査を行い、その解明に努めている。

本書は、現時点において判明している装飾壁画について、古墳時代の装飾壁画について研究され、鬼ノ岩屋古墳群調査検討委員会委員長でもある福岡大学名誉教授の小田富士雄氏や調査に携わった別府大学文化財研究所研究員の玉川剛司氏の調査研究をもとにして、解明されつつある鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画について紹介を行うものである。

空から見た鬼ノ岩屋古墳群（南から）

鬼ノ岩屋古墳群の位置図（1/600）

鬼ノ岩屋１号墳の石室入口

鬼ノ岩屋１号墳の石室内部（前室から玄室を望む）

鬼ノ岩屋２号墳の石室内部（段になっているところが屍床）

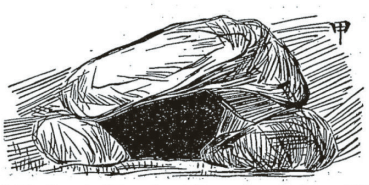
## 2　過去の調査と研究

鬼ノ岩屋古墳群は古くから知られた古墳群で、江戸時代には豊後岡藩の唐橋世済が古墳を訪れ「此郡朝見郷北石垣原有石窟二區、巨石築之、以土封其上、竹樹鬱蒼」と記しており、江戸時代後期にはすでに横穴式石室が開口していた様子をうかがい知ることができる（唐橋 1804）。

明治時代に入ると佐藤蔵太郎が『豊後史蹟考』の中で鬼ノ岩屋古墳群を取り上げ、別府町長などを務めた日名子太郎とともに古墳を訪れて、石室内部の様子をスケッチとともに報告している（佐藤 1905）。

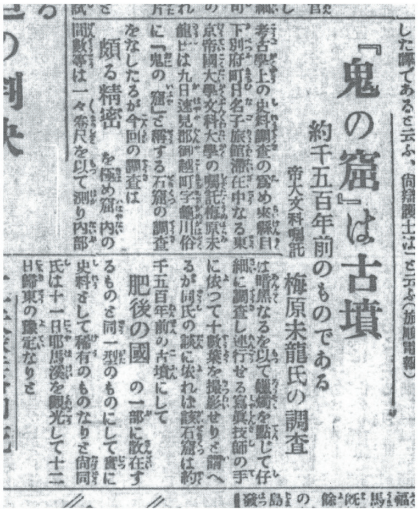
大正 11 年頃には、のちに京都大学教授を務めた考古学者の梅原末治が古墳を訪れ、両古墳を詳細に観察し、石室実測図を作成し報告を行っている（梅原 1924）。また、昭和初期には人類学者の鳥居龍蔵も訪れ古墳の報告を行った（鳥居 1933）。

明治から大正・昭和初期にかけて訪れた学者により、横穴式石室を持つ古墳として知られるようになった鬼ノ岩屋古墳群であるが、石室内部の装飾や彩色について言及はされることはなかった。



『豊後史蹟考』収録の鬼ノ岩屋「甲」（2 号墳）挿図

鬼ノ岩屋 1 号墳の絵葉書（明治末～昭和初期）



『鬼の窟』は古墳

約千五百年前のものである

帝大文科嘱託　梅原末龍氏の調査

肥後の國の一部に散在す

1921 年 8 月 12 日付大分新聞　梅原氏調査の新聞記事

鬼ノ岩屋古墳群の古写真や新聞記事

別府大学の賀川光夫は、古墳群の調査成果を昭和 27 年に『別府市北石垣原鬼の岩屋古墳調査報告書』としてまとめた。この中で賀川は「鬼の岩屋古墳に於て、最も注目すべきものは、玄室の厨子形石棺と各壁に彩色された装飾である。全体として彩色は或る構図を持った所謂壁画ではなく、壁面に彩色したものである。然し乍ら玄室右側の巨石には、ある構図を持った原始絵画を思わしめる彩色があるが、其の構図を全く判読することは出来ない」として、石室内部の装飾のうち彩色については認めたものの、壁画の認定に際しては慎重な姿勢をみせている。また同報告書の考察で再度装飾壁画の可能性にふれ「特に第一号墳の玄室右側壁に、彩色されたものに構図があるとすれば、東九州地方に於ける装飾古墳の新資料として、貴重なものとなるのであるが、この問題に就ては、にわかに結論することは出来ない」として、やはり慎重な姿勢をみせつつも将来的な調査研究の進展に期待を示している（賀川 1952）。

賀川による調査報告を受けて、昭和 32 年に国史跡に指定された鬼ノ岩屋古墳群であるが、昭和 36

年に賀川により執筆された『大分県史料』の「壁画古墳と石人」の項には鬼ノ岩屋古墳群は紹介されておらず、装飾古墳として認識されてはいなかった（賀川 1961）。

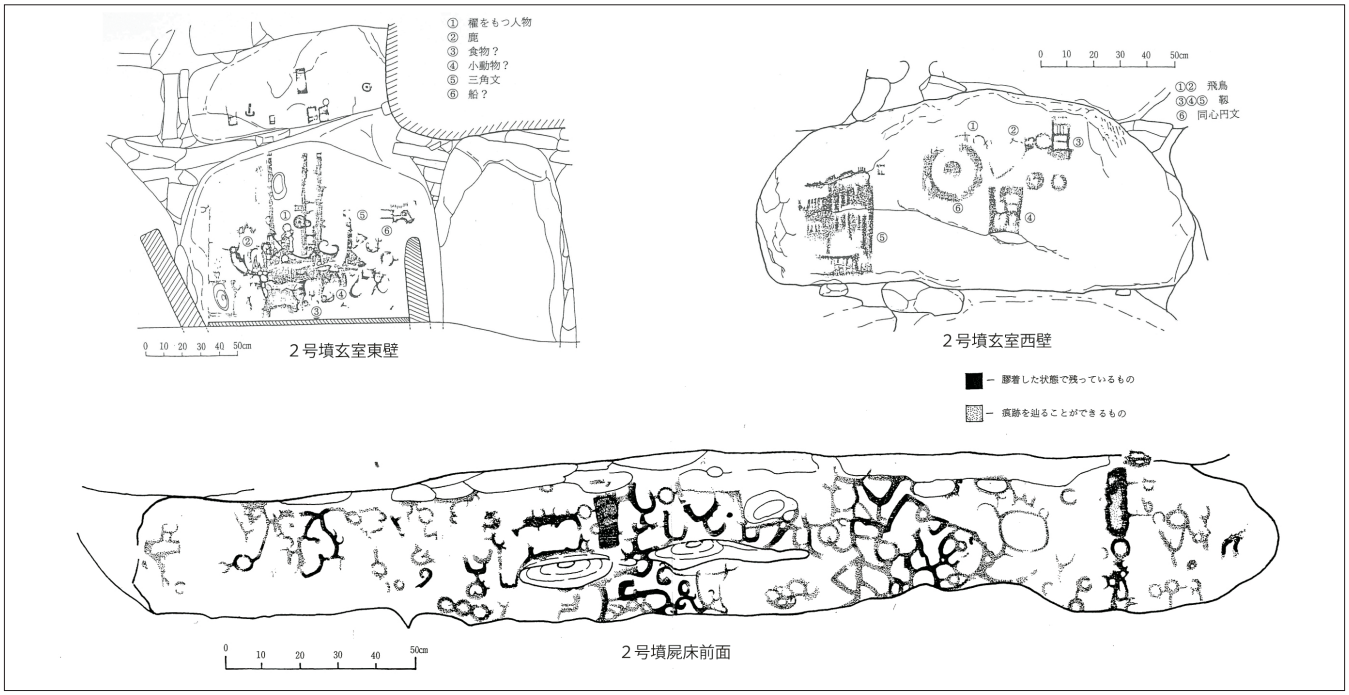
別府大学の後藤重巳は、昭和 45 年 3 月に刊行された『べっぷの文化財 - 第 1 号』において、1 号墳の前室で鋸歯文を確認したことを報告した（後藤 1970）。

これを受けて昭和 46 年に賀川により刊行された『大分県の考古学』では、直前に発見された鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画について、「壁画古墳」の項の本文中には紹介されていないものの、〔追記〕として「別府市北石垣鬼岩屋古墳一号の前室右壁面に白い顔料により鋸歯文が記されている。この横口式石室は前・奥壁に朱色を塗布した石面が広くみられていたが、装飾画の存在は今日まで注目されていない。このたび、市文化財調査員後藤重己氏が、改めて再調査されたことから彩色の壁画が発見された」と記している（賀川 1971）。

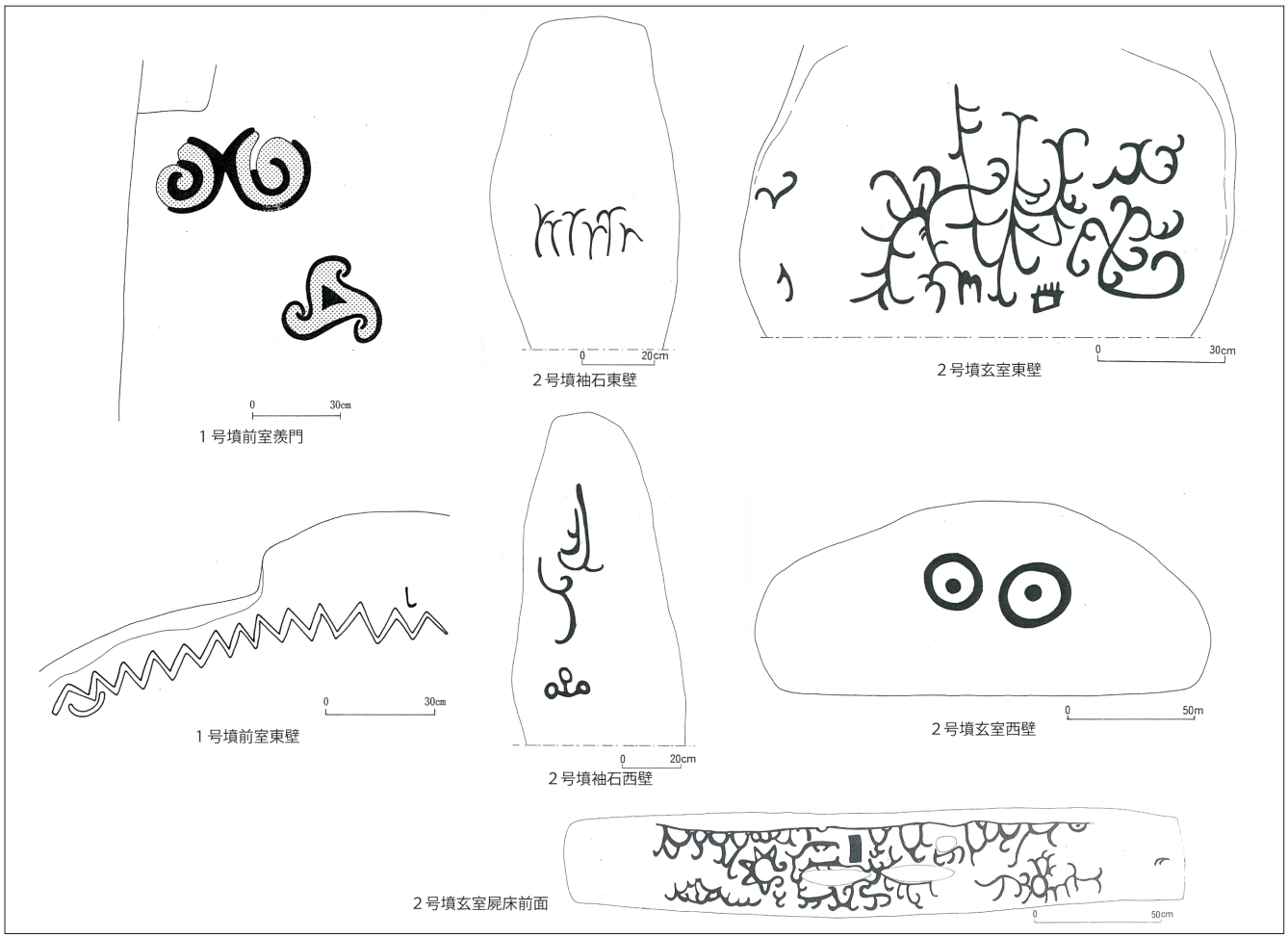
昭和 40 年代に装飾壁画が確認された鬼ノ岩屋 1 号墳に対して、2 号墳の装飾壁画の発見はやや遅れて、昭和 57 年 9 月に別府大学の考古学演習として訪れた賀川光夫とその学生達によってはじめて確認されることになった（坂田・副枝 1985）。

装飾壁画の図案については、当時別府大学の学生であった宇野宣彦により、鬼ノ岩屋 2 号墳の検討（宇野 1983）が行われたのに続いて、昭和 60 年に別府大学の坂田邦洋らは、赤外線写真撮影を行い装飾壁画の実測図の作成を試みて、鬼ノ岩屋 2 号墳の屍床前面や東西の側壁、羨門で装飾壁画を確認して報告を行った（坂田・副枝 1985）。また、坂田らは昭和 61 年に鬼ノ岩屋 1 号墳の報告を行い、前室側壁の鋸歯文に加えて、玄門に施された装飾壁画を確認し、実測図を公表した（坂田・宇都宮・遠藤 1986）。

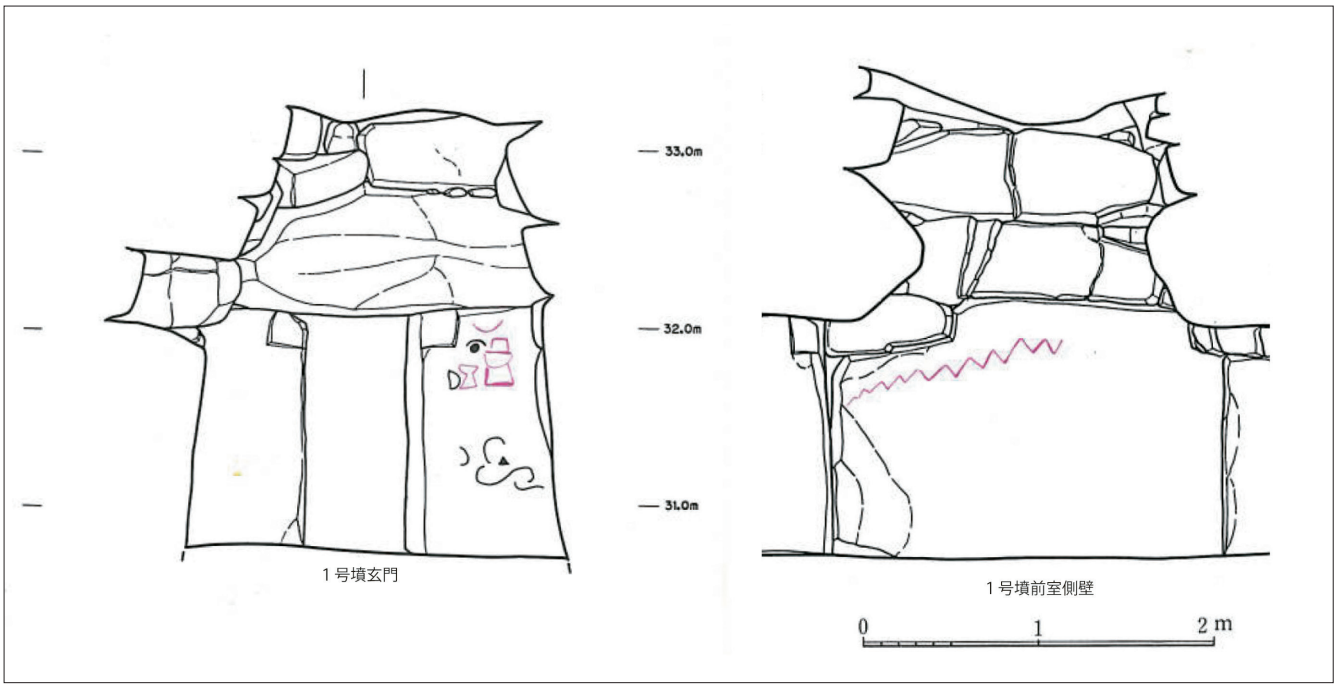
大分県教育委員会は、平成 7 年に『大分県の装飾古墳』を刊行し、鬼ノ岩屋 1 号墳の実測図とともに各文様についても詳細に報告し、鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画を検討する際の基礎資料を提供している（村上 1995）。




装飾復元案①（宇野 1983）




装飾復元案②（坂田 1985、坂田・副枝 1985）




装飾復元案③（村上 1995）

## 3　鬼ノ岩屋１号墳の装飾壁画

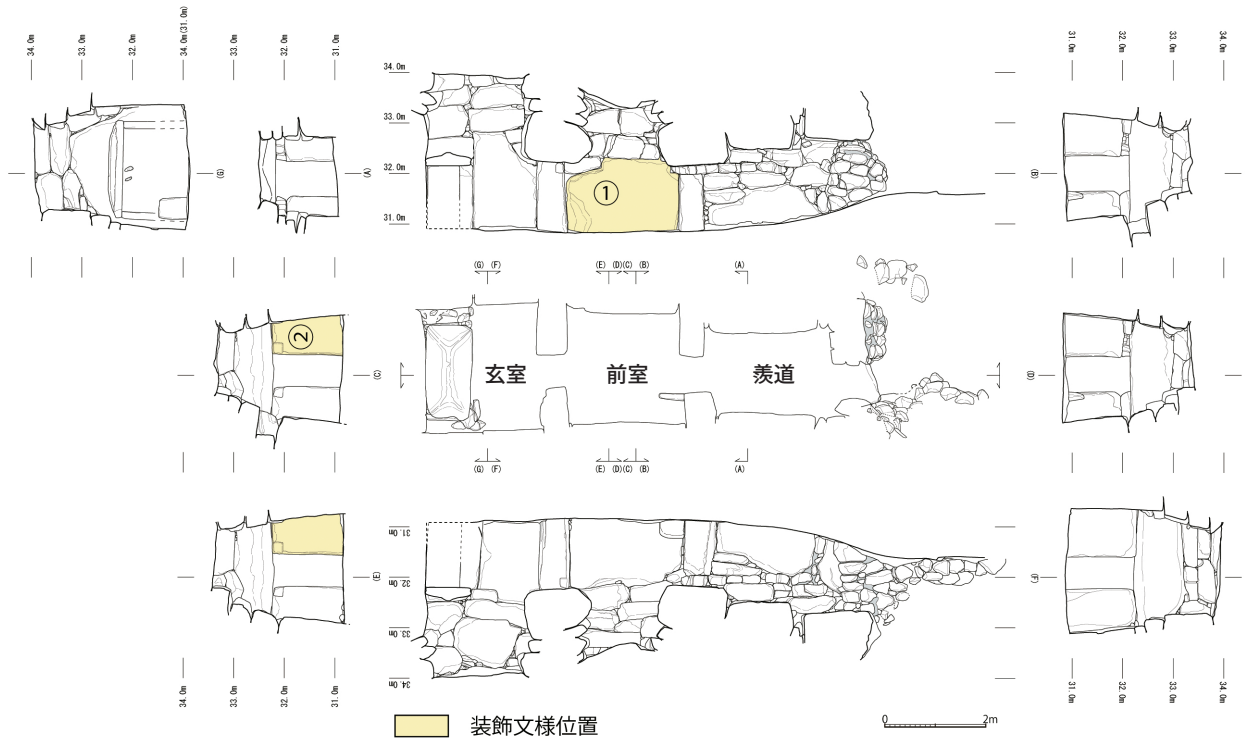
鬼ノ岩屋１号墳の装飾壁画は、横穴式石室の前室で２カ所確認されている。ひとつは前室の右側壁腰石にあり、もう一カ所は玄門右側の袖石に描かれている。

### ①前室右側壁腰石の装飾壁画

腰石全面に赤色の顔料が塗られ残存状態も良い。装飾壁画は白色もしくは黄色の顔料を使用して、石の上部に描かれている。従来より「鋸歯文」「連続三角文」とされている文様であるが、詳細な観察の結果、複数の波状の文様が確認された。また、玄室側の先端部には同様の顔料で「U 字状」の装飾が描かれ「舟」であると想定される。これらの表現は「波濤」表現とも考えられ、死者の霊魂を舟に乗せて海の彼方に運ぶという「常世思想」に拠った葬送行為を表している可能性も指摘されている（小田 2020）。

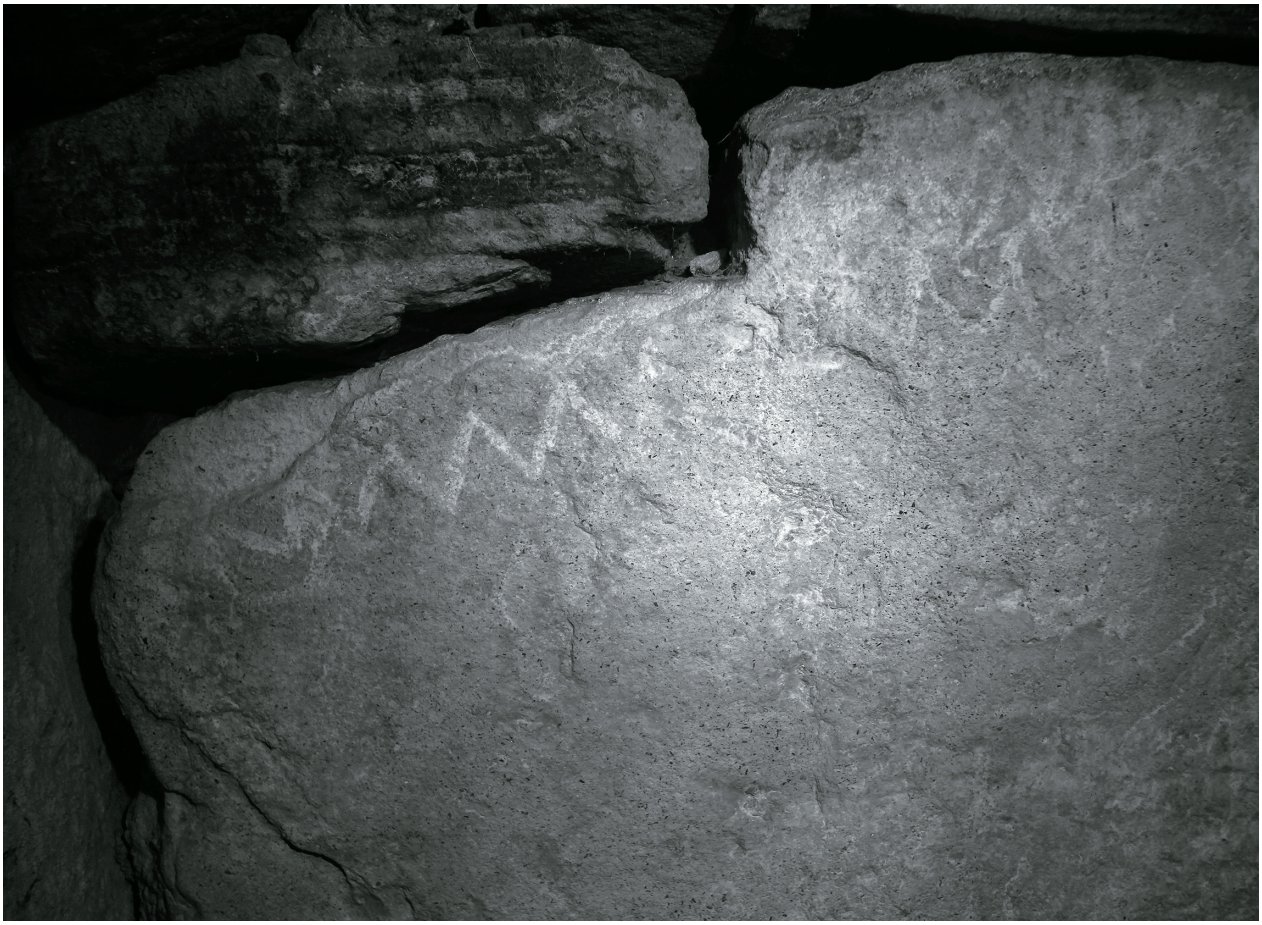
### ②玄門右側袖石の装飾壁画

玄門右側袖石には、石の上段から中段にかけて各種の装飾が描かれている。この面にも赤色の顔料により彩色され、上段には左から「弓」・「靫」・「鞆もしくは円文」・「靫」が描かれている。靫とは矢を入れて携帯する道具であり、鞆は矢を放ったあと弓の弦が腕に当たるのを防ぐ道具であり、いずれも武具である。下段には中央に黒色の三角形文を配置し、その周囲をＳ字状の文様が入り組みながら、三角形文を取り囲む形で描かれている。




鬼ノ岩屋１号墳装飾壁画位置図

鬼ノ岩屋１号墳①前室右側壁腰石の装飾壁画

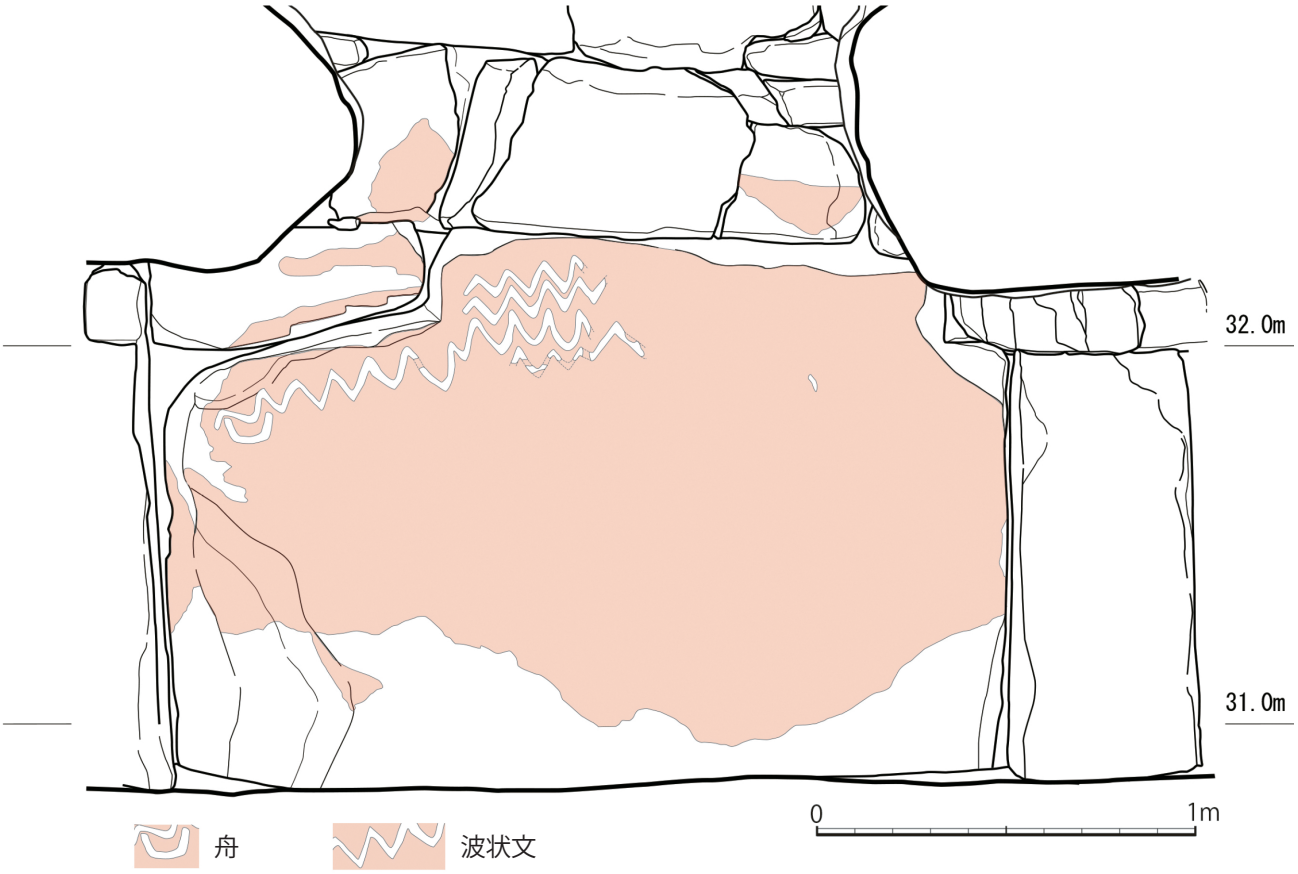


鬼ノ岩屋１号墳①前室右側壁腰石装飾壁画の赤外線カメラ撮影

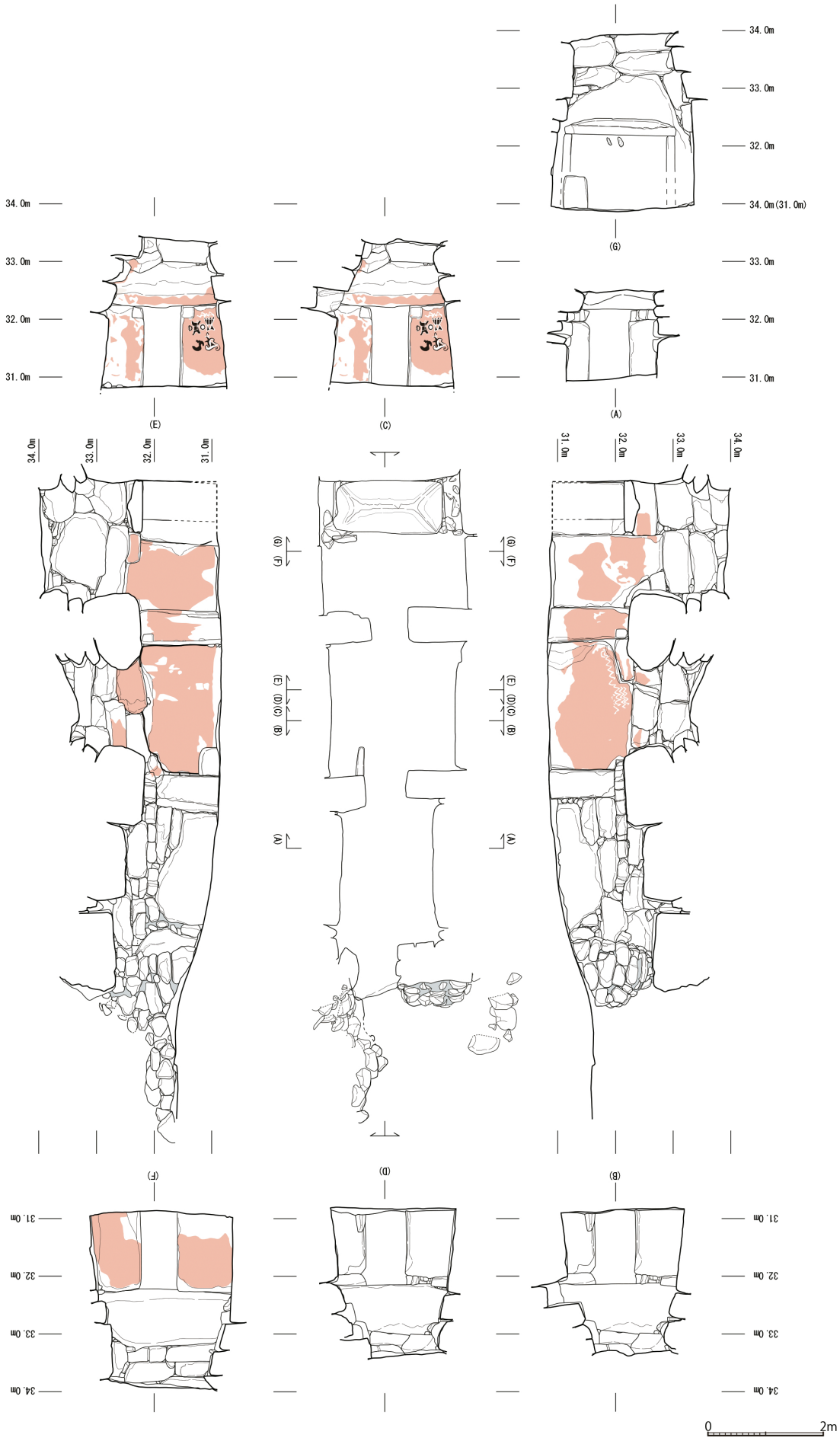
鬼ノ岩屋１号墳②玄門右側袖石の装飾壁画

鬼ノ岩屋１号墳②玄門右側袖石装飾壁画の赤外線カメラ撮影

①前室右側壁腰石の装飾壁画




②玄門右側袖石の装飾壁画




鬼ノ岩屋１号墳装飾壁画（1/100）

## 4　鬼ノ岩屋２号墳の装飾壁画

鬼ノ岩屋２号墳の装飾壁画は、横穴式石室の玄室で５カ所確認されている。

①玄門右側袖石

全体的に不鮮明であるが、縦長に伸びるような文様が描かれていた可能性がある。

②玄門左側袖石

上段には直線状、中段には弧状の装飾が描かれている。下段には３つの円形の文様をそれぞれを線でつなぐ文様が描かれている。

③玄室右側壁腰石

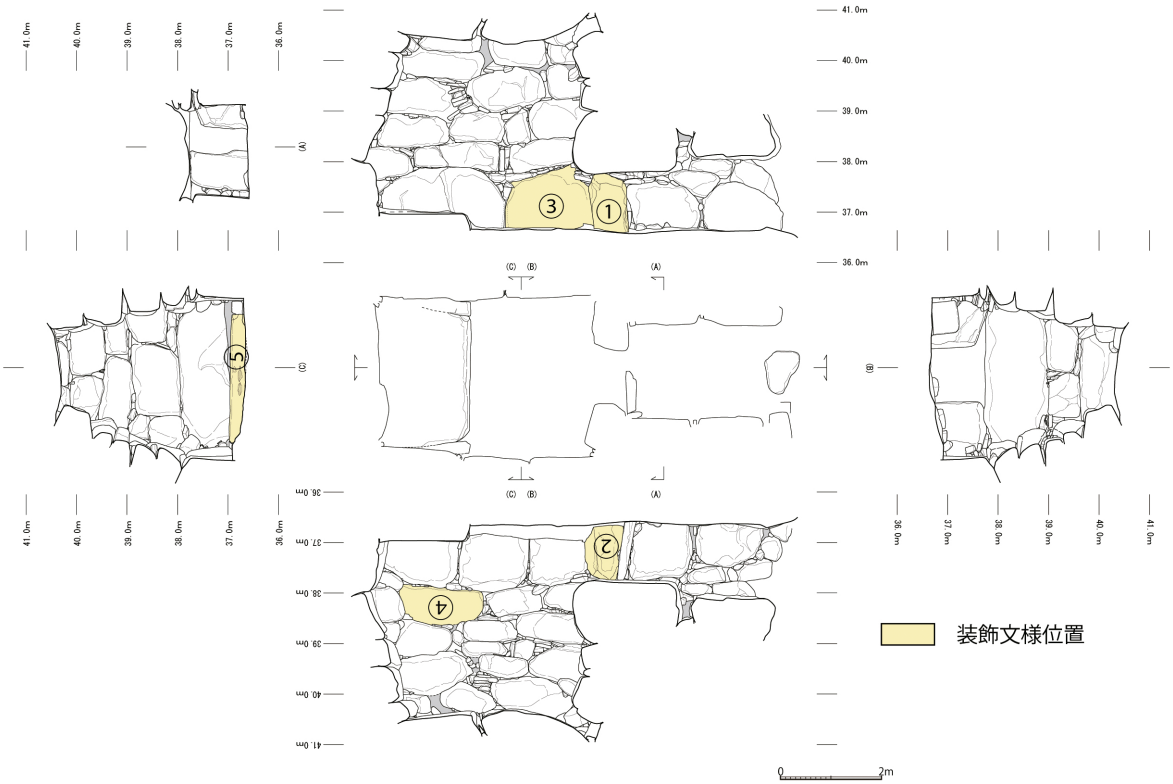
中央に大型の「双脚輪状文」が描かれ、その左には放射線状の文様があり「翳」の可能性が想定される。中央の下段には、４本の矢を入れた「鞆」が描かれている。そのほかには「蕨手状」の文様が描かれているようである。

④玄室左側側壁

左右に２つの同心円文が描かれている。

⑤玄室屍床部前面

屍床には「邪視文」と呼ばれる２つの窪みがあり、その上に四角形の「盾」、盾の左側には鞍のついた「馬」、その下には「舟」が描かれている。邪視文の左には「双脚輪状文」があり、右側に脚がついている。また、屍床部前面の全体にわたり装飾が描かれている。




鬼ノ岩屋２号墳装飾壁画位置図

①玄門右側袖石の装飾壁画（右は赤外線カメラ撮影）

③玄室右側壁腰石の装飾壁画

②玄門左側袖石の装飾壁画（右は赤外線カメラ撮影）

③玄室右側壁腰石の赤外線カメラ撮影

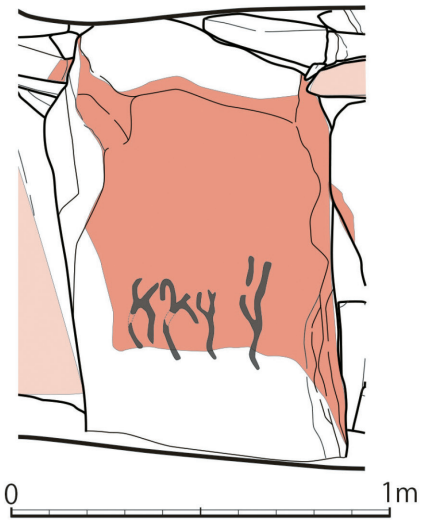
④玄室左側側壁の装飾壁画

⑤玄室屍床部前面の装飾壁画

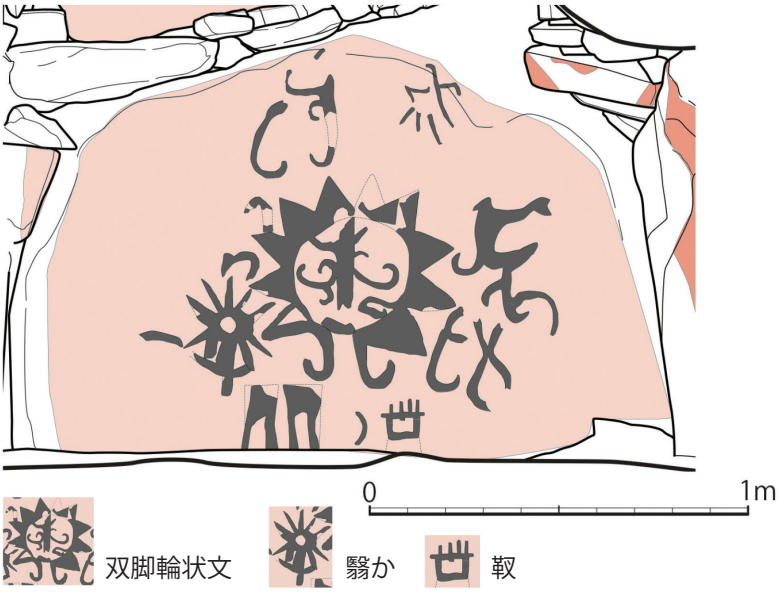
④玄室左側側壁の赤外線カメラ撮影

⑤玄室屍床部前面の赤外線カメラ撮影

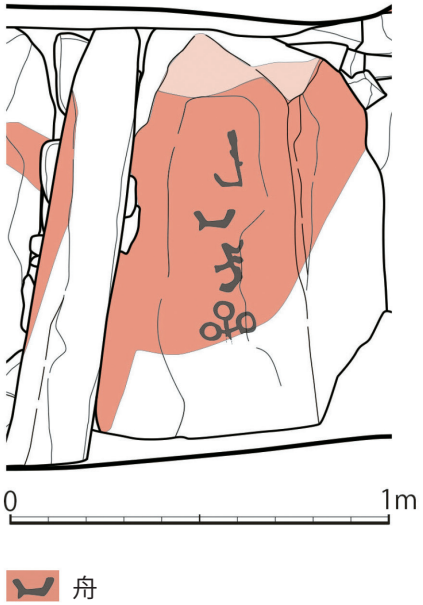
①玄門右側袖石



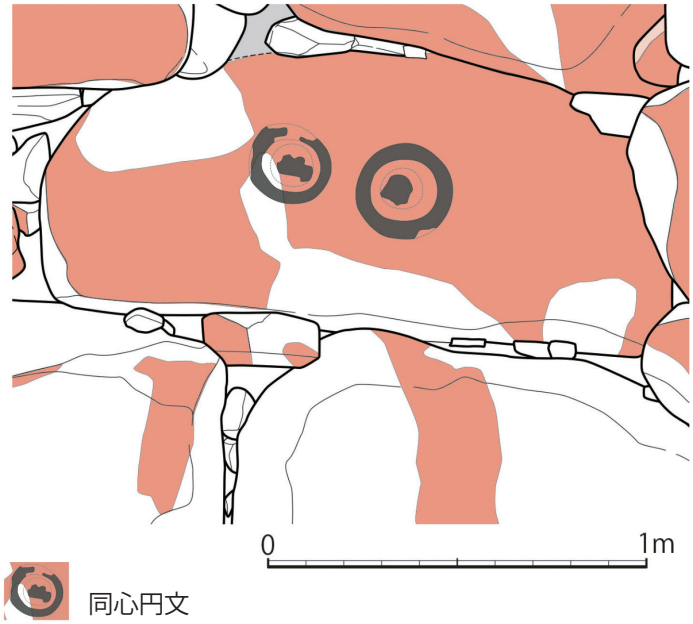

③玄室右側壁腰石



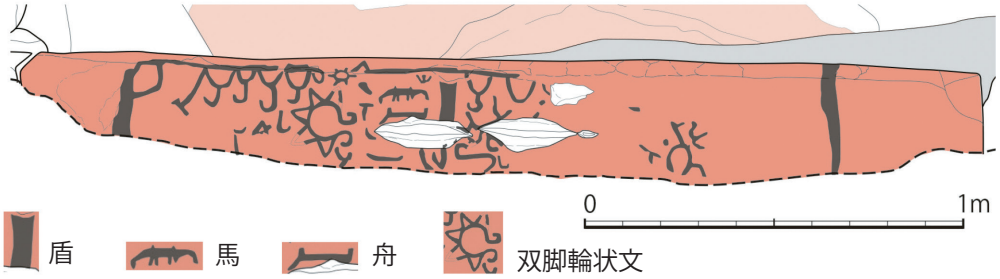

②玄門左側袖石




④玄室左側側壁




⑤玄室屍床部前面



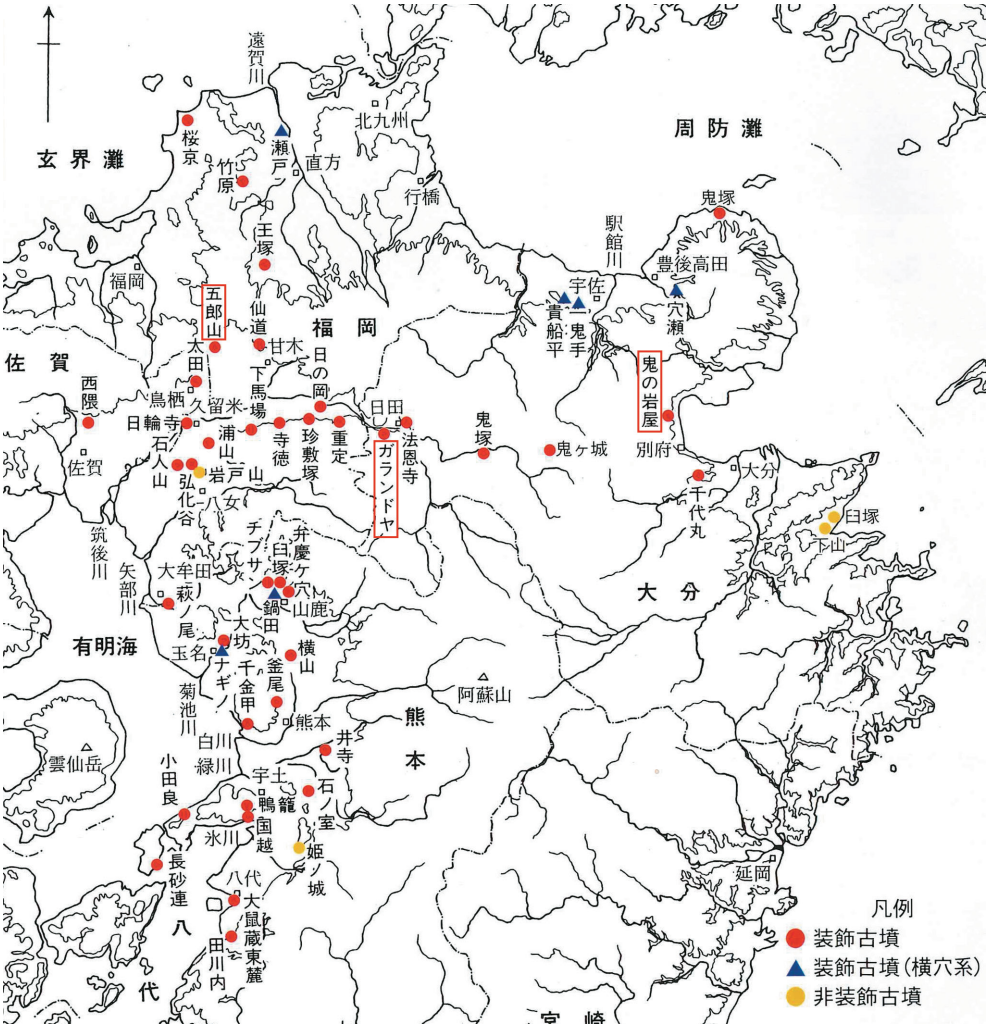
鬼ノ岩屋２号墳装飾壁画（1/100）

## 5　鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画の特色

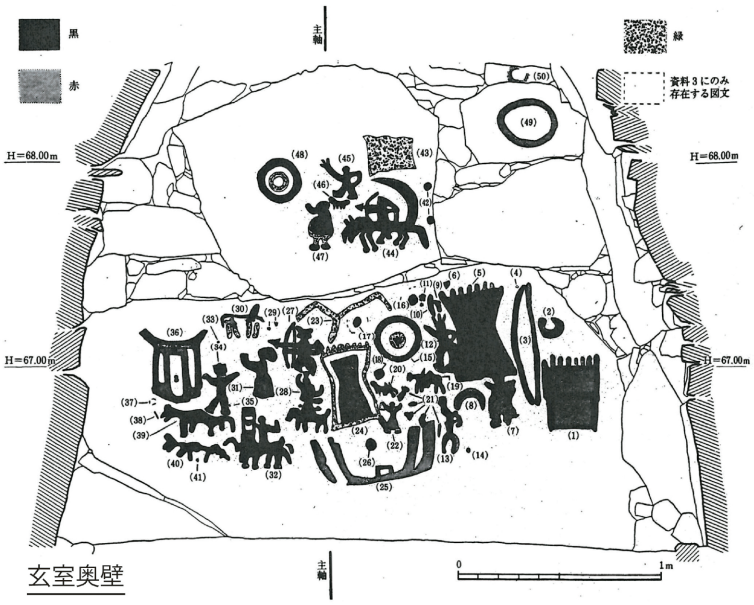
鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画について、最新の調査成果をもとにして石室の各所に描かれた壁画についてみてきた。１号墳については、前室右側腰石に「波状文」や「舟」を確認し、玄門右側袖石には「弓」・「靫」（弓矢を入れる道具）などの武器類や三角文をＳ字状文様が取り囲む文様などを確認した。２号墳には、屍床部前面に「盾」・「馬」・「舟」・「双脚輪状文」などが描かれ、左側側壁には２つの「同心円文」、右側側壁には「双脚輪状文」・「靫」などが描かれているのを確認した。

鬼ノ岩屋古墳群が造られる６世紀後半から７世紀初頭にかけては、福岡県や熊本県を中心にして装飾壁画が描かれる古墳が多く造られる。鬼ノ岩屋古墳群にみられた様々な装飾壁画もこれらの地域との関係において描かれたものと考えられている。

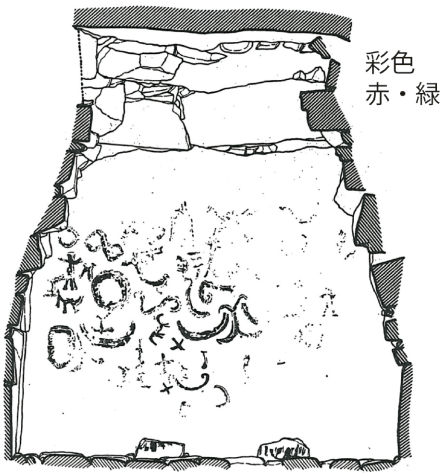
装飾壁画の変遷とその意義について研究を進めている小田富士雄は、６世紀後半に築造された福岡県筑紫野市に所在する五郎山古墳の玄室壁画を「大陸系の葬送思想までも不十分ながらたどりうるものであり「人の動きを主体とした葬送儀礼を表明したにぎやかな装飾画」」であると評価し、伝統的な盾・靫・弓・鞆などの武器類・狩猟儀礼のほか、大陸系の「誄」儀礼などにまでたどりうる内容で解釈で



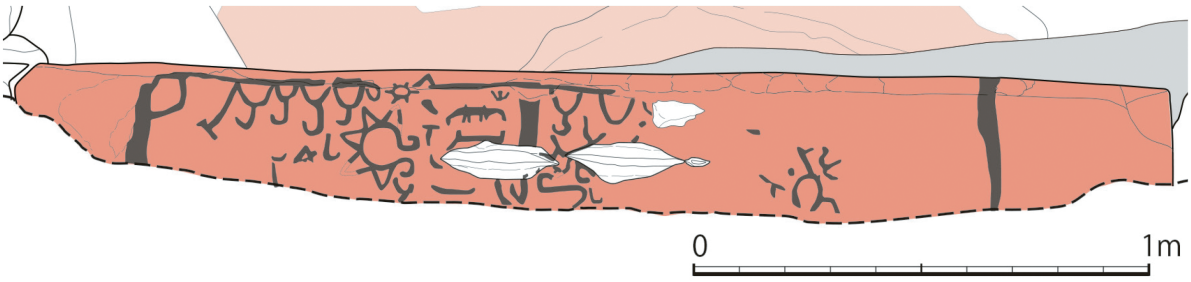

九州装飾古墳分布図（『別府市誌 2003』から転載加筆）




五郎山古墳（福岡県筑紫野市）




ガランドヤ１号墳（大分県日田市）




鬼ノ岩屋２号墳屍床部前面の装飾壁画（大分県別府市）

各地の装飾壁画の比較

きると指摘した（小田 2020）。

この五郎山古墳（福岡県筑紫野市）と鬼ノ岩屋古墳群の中間に位置するガランドヤ古墳（大分県日田市）では、五郎山古墳でみられた装飾文様が集約（簡素化）され、人物や動物の画題に占める位置が後退するなど、日田地域における装飾壁画の受容形態の一端を確認することができる。鬼ノ岩屋古墳群は、この日田地域を介して装飾壁画を受容することになるが、６世紀後半に造られた鬼ノ岩屋２号墳の屍床部前面では、画題全体に植物上の文様が描かれ、五郎山古墳では画題の主体であった人物・盾・馬・舟が付帯的に小さく加えられる形となっており、このような鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画の在り方は、装飾古墳文化の最終段階に位置付けられるという指摘もある（小田 2020）。

装飾古墳文化は古墳時代後期に九州に於いて花開き、その中心地である福岡県や熊本県では多様な装飾により石室内部が飾られている。鬼ノ岩屋古墳群は、装飾古墳文化の東端に位置し、18 頁の地図でもわかるように筑後川（ちくごがわ）を遡上して日田・玖珠地域を経由して受容した形となっている。鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画は、装飾古墳文化の東端に位置する地域の受容の在り方を表すと同時に、古墳時代における地域間の連帯性や葬送儀礼の様子を表しているものと考えられる。

## 6　おわりに

鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画が、昭和 45 年（1970）発行の『べっぷの文化財－第 1 号－』においてはじめて報告されてから 50 年がたつ。この間、多くの研究者が装飾壁画の図案について検討を行ってきた。別府市教育委員会では、平成 20 年度より鬼ノ岩屋古墳群の各種調査を実施し、平成 28 年度からは装飾壁画の実態調査に取組み、壁面の埃を除去するクリーニング調査、赤外線カメラ撮影、目視による調査及び実測を実施した。これにより、これまで不鮮明であった部分の装飾も判明し、各地の装飾古墳との比較も可能になった。1 号墳ではこれまで一条の「連続三角文」と考えられていた部分に複数の文様が確認され「波状文」となる可能性があることが判明した。2 号墳では、屍床前面部に「盾」「馬」「舟」「双脚輪状文」などの図柄も明瞭に確認され、玄室右側腰石部分の多様な装飾が存在することも今回の調査で明らかとなった部分である。

鬼ノ岩屋古墳群は、6 世紀後半から 7 世紀初頭に造られ、約 1400 年にわたり守られてきた。今回の調査は現時点での鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画の状態を記録したものであり、次世代へより良い状態で引き継いでいくことが今後の課題であると考えている。

### 引用参考文献


唐橋世済 1804『箋釈豊後風土記』

佐藤蔵太郎 1905『豊後史蹟考』甲斐書店

梅原末治 1924「豊後国速見郡北石垣村の石室古墳」『考古学雑誌第十四号第四号』考古学会

鳥居龍蔵 1933「第三節　原史時代」『別府市誌』別府市教育会

賀川光夫 1952『別府市北石垣原鬼の岩屋古墳調査報告書』

賀川光夫 1961『大分県史料 20』大分県史料刊行会

後藤重巳 1970『べっぷの文化財　第 1 号』別府市教育委員会・別府市文化財保護委員会

賀川光夫 1971『大分県の考古学』吉川弘文館

宇野宣彦 1983「鬼の岩屋二号分墳の壁画装飾について」『芸術学論叢第 6 号』

坂田邦洋・副枝幸治 1985「鬼の岩屋第 2 号墳の壁画について」『別府大学紀要第 26 号』別府大学会

坂田邦洋・宇都宮英二・遠藤和幸 1986「鬼の岩屋第一号墳の壁画について」『別府大学紀要第 27 号』別府大学会

村上久和 1995「7. 鬼の岩屋 1 号墳」「8. 鬼の岩屋 2 号墳」『大分の装飾古墳』大分県教育委員会

清水宗昭 2003「第 1 章第 4 節　古墳の世紀」『別府市誌第 1 巻』別府市

別府市教育委員会 2019『鬼ノ岩屋古墳群－装飾調査に関する概要報告書－』

小田富士雄 2020「鬼ノ岩屋古墳群の石室装飾」『鬼ノ岩屋古墳群』別府市教育委員会

玉川剛司 2020「第 3 章第 3 節　装飾壁画の調査」『鬼ノ岩屋古墳群』別府市教育委員会



【執筆担当者】 秦　広之（別府市教育部社会教育課）

べっぷの文化財　No.50
－鬼ノ岩屋古墳群の装飾壁画－

令和２年３月

発　行　　別府市教育委員会
編　集　　別府市教育委員会
　　別府市文化財保護審議会
印　刷　　大野印刷株式会社